

# 会津藩婦女子の籠城（続）

阿 達 義 雄

Women and Children in the Siege of Wakamatsu Castle (Ⅱ)

by

Yoshio Adachi

## 総 説

戊辰会津戦争の際、会津鶴ヶ城は数万の官軍に包囲され、会津藩士や、その家族等の約五千人が一か月間籠城を余儀なくされたのであった。

その時、城中にあった女性が、当時の事を後で語ったものとしては、山本八重子・中野優子・依田菊子・山川操(注一)等の回想記があり、私共はこれらによって銃砲弾下に戦った婦女の活躍、城内の惨状、之に押しひしがれることなく敢闘した藩士の姿を想見することができる。

間瀬みつ女の『戊辰後雑記』も右婦人同様に戊辰後数十年を経てから、当時の若干のメモを基として記された回想記であるが、前者の多くが戦闘を主として主観的に戦闘そのものを描こうとしているのに対し、みつ女は当時における自分等の家族を中心として、籠城中の大奥の長局部屋の生活や、開城後の一家の生活の推移を淡々と記したものである。

本書は間瀬家の遺族子孫のために書き残したものらしく、個条書きになっている処の多い候文の覚書であって、殆んど文飾も加えられていないものであり、また、それだけに素材から発する真実の白光が感じられ、いろいろな連想を誘起する含蓄性に富んだ生活記録である。

筆者みつ(39歳)は会津藩の前用人であった間瀬新兵衛(67)の次女で、当主たる350石、朱雀二番足輕中隊頭の岩五郎(29)、土中白虎二番隊員源七郎(17)の姉であり、その妹にのぶ(33)、つや(31)、きよ(22)、ゆふ(19)があり、この中のきよは隣家の赤羽庄三郎(300石)の長男恒之助に嫁いでいたが、臨月のため、入城前にその母ます(58)が隣家との談合によって一緒に入城させるために自宅に連れてきていたのであった。

なお、岩五郎には妻ゆき(22)と生後5か月の長男清吉があり、この清吉は後に間瀬家の唯一の男子として、一家結集の精神的支柱となるのである。

慶応4年8月23日から明治元年9月22日迄の籠城期間に、間瀬家では、8月23日に次男の白虎隊の源七郎は飯盛山で自刃、同29日の長命寺の戦では当主の岩五郎は朱雀二番隊頭として壮烈な戦死、9月14日の官軍の総砲撃の際には父新兵衛が、城中御座の間で大砲の破裂弾のために戦死を遂げている。したがって、後に残された者は幼児の清吉以外は女だけの一家になってしまった。

この成人三人の戦死は、間瀬家にとっては何よりの重大事件であったに拘らず、この三人の戦死については全然記されていず、この種の文書によく見られる痛歎悲憤の文字は見られない。他の親戚知人の些事についての書き留めがあるに拘らず、間瀬家の光輝ある、これ等三人について一語も記されていない点には特に注意すべきであろう。

之に反し、8月23日朝、入城の際は前夜より周到な準備をし、垂駕籠に要用品を入れ、みつ女はのぶと共に三ノ丸に昇き込み、みつ女は、間瀬家の家族の老母、赤ん坊に至るまで全部入城させたばかりでなく、出産のために実家に帰っていた妊婦きよに至る迄無事入城させたことを詳細に記録している。

入城の翌日、岩五郎妻ゆきが破裂弾によって負傷し、入城5日目にはきよの出産があり、大奥の瀬山部屋が間瀬家の婦女子の居室とされたが、この8畳の間は家中藩士の負傷者3人と一緒であった。それにしても、大書院、小書院の大集団の病室とは違って、間瀬家族がみな同じ部屋におられたために何かにつけ便利な点もあったようである。

みつ女の籠城の覚書は、この大奥の長局の一室から眺めた間瀬一族の周辺に起きた、この期間中の大小様々の出来事であって、城内外の戦は間接的にしか語られていないのに反し、籠城中の親戚知人の名前や、それらとの交渉がかなり詳しく記されているのも、本書の一つの特徴となっていて、一家の備忘録的な处も見られる。

(前号の「会津藩婦女子の籠城」に『戊辰後雜記』の8月23日迄を引用したので、本稿では24日以降のものである。)

## I 本丸奥御殿における自刃者ときよの出産

【廿四日、照姫様、手負の者共（を）御見舞下され候由、御触れ御座候に付き、御待ち上げ居り候处、ゆき、頭に破裂玉当たり、それぞれ御手当て下され候处、浅手にて、深しきもなく、また怪我致し候ては気の毒と、奥、御指図にて、又御休息へ参り、此御座は殿様御住居の由、まことに私共など拝見も出来ぬ所なり。

八畳の御間にして明り戸、違ひ棚これあり、立派に御座候。私共も恐れ入り候事に存じ候。

此御座の内には築瀬三左衛門内室、小池稼吉家内(註二)、杉田兵庫家内、私家内一同居り候。】

24日に間瀬岩五郎の妻ゆきが城内へ撃ち込まれた砲弾の破片によって負傷し、藩主松平容保公の義姉照姫から見舞を受けている。

『若松記』に「八月廿四日、敵、三宅邸、築瀬邸より頻りに発砲、三の丸守衛の兵大いに苦しむ。」とあり、「八月廿四日、城中城外砲戦不止」（『山内豊範家記』）、「八月廿四日、大町口より攻撃、参謀の指揮により、風に乗じて火を放て諸士の邸宅を焼く」（『島津忠寛家記』）などであるから、郭内の士族屋敷に放火する前には銃砲弾戦が特に著しかったので、ゆきはその時の破裂弾によって負傷したのであろう。

手当ての結果、傷は浅手ではあったが、赤ん坊を抱えたゆきが局部屋にいて、再度怪我するようなことがあってはという奥の指図によって、特別の配慮から藩公の座所であった御休息の間に移されたのであった。一般の傷病者は広い大書院や小書院に入れられていたのであるが、何しろゆきは乳児を抱えており、女ばかりで入城した上士の家族でもあったので特別の配慮をされたのであろうが、それにしても、みつ女は「此御座は殿様御住居の由、まことに私共など拝見も出来ぬ所なり……私共も恐れ入り候事に存じ候」と恐縮している。

この殿様の御休息所に割り当てられた者を見ると、2,200石の築瀬三左衛門、1,000石の杉田兵庫、500石の小池稼吉、350石の間瀬岩五郎等の比較的高禄の家族ばかりであった。

【しかるところ、廿五日昼過、弾薬に火移り、地響きと共に恐しき音致し、右に驚き、早まって杉田の家内残らず自刃す。兵庫母・伯母・妻ゆふ・伴勝彦。伯母、伴勝彦三歳即死す。母と妻ゆふ存命也。

私共も一所に居、気の毒に存じ候事に候、此弾薬のためには、手負、即死も少々あり候へども、名々記さず。】

四境に遠征していた会津藩の各部隊が続々と帰城していた頃に、城内外の者を驚かした二つの重大事件があった。

その一つは25日における小田山麓の火薬庫の爆破であり、他の一つは、その翌日全城を一望の下に俯瞰することのできる小田山が官軍に占領されたことであった。

鶴ヶ城東南の小田山の北麓、小田村にあった火薬庫の爆破については、

「小田山の北麓に火薬庫あり、奥行十二間、間口三間半あり、精製の火薬五百貫を蔵む。小田の西軍屢々来りて之を奪ふ。城兵之を運ぶ能はず。

是に於て八月二十五日、決死の足輕二名密に之に近づき、火を庫内に投じて之を爆破せり。此声数里の外に達し、激震鳴動、万雷の一時に落ちるが如く、四方の山谷に避難せて市民も、鶴ヶ城一時に爆破崩壊せしものと信ぜり、殊に城中には驚愕憤慨既に自刃せしものもあり。」

（『会津戊辰戦争』）

これは会津側の記録であって、薩番兵一番隊長伊藤祐徳の従軍日記の8月25日の記事には、

「当隊持口最寄り大田垣村（小田垣村）へ、賊の塩硝蔵之れある旨、生捕の甚之丞申し出で候に付、形行本営へ申し出で、大砲半坐至急差廻し相成りたく申し出で候ところ、三時頃、四斤半砲一門差越され、右塩硝蔵へ発砲候ところ破裂致し、その響き実に山岳も崩るごとくにして、木石とも飛散し危険に候」

とあるが、会津藩側では敵に利用されることを恐れて自分等の方で爆発させたのだと記している。

ここに注意すべきは「その響き実に山岳も崩るごとく」や、「その声数里の外に達し、激震鳴動、万雷の一時に落ちるが如く……殊に城中には驚愕憤慨既に自刃せしものもあり」の文句であって、この山岳も崩れるような大音響に驚いて、鶴ヶ城も今は最後の秋だと早合点して、杉田兵庫の母やえ子(57)、叔母みわ子(57)、妻ゆふ、伴勝彦(3)が自刃をしようとしたが、同室の者の臨機の処置や医師の手当てによって、母やえと妻ゆふの命だけは取り止めることができた。

小田山は鶴ヶ城の東南、豊岡を去る約1,500メートルの距離に位置している標高(山頂)378メートルの高地で、ここから全城を見下すことのできる要害の地であったが、8月26日午前、薩一番砲隊(五門)とアームストロング砲を有する肥前の大砲隊に占領され、その後、この山頂から天守閣その他の重要建築物が砲撃され、城内の者を絶えず苦しめた。

このために会津側では、小田山と天寧寺との中間の来往が妨げられ、結局、会津側の城外の連絡は鶴ヶ城の東から南までの間に縮小され、城の約四分の三近くを包囲されたと同様になってしまった。

また、本丸の西隅の炊事場の他に、9月1日から西出丸や二の丸にも炊事場が作られるようになったのも、小田山等からの激しい砲撃のため、婦人が本丸から城内各所に防備していた兵のための食膳(握り飯等)を運搬する際に、死傷者の生ずることを避けようとしたものと考えられ、本丸の豪壮建築が屢々火災に瀕したのも、多くは小田山の大砲からの砲撃によるものであった。

間瀬家から隣の赤羽庄三郎(300石)の長男恒之助の許に嫁いで、臨月の身をもって入城したきよ(新兵衛の五女)が急に陣痛を催すようになったのも、25日の火薬庫の爆発に続く、26日の小田山からの激しい砲撃によるショックに起因するものであろう。これは、

「(小田)山上の要地により我アルムストロング並びに四封度銃を以て終夜本城を射撃致し候」(肥前藩届書)

「廿六日天寧寺山乗取、賊の火薬庫分捕、爰より城を十町余の眼下に見下し候故、終日城を

砲撃致し申し候」(薩摩藩届書)

などによっても領かれることである。

【廿六日、きよ事、産催しにつき、局瀬山・うた部屋(へ)戻り、廿七日朝、女子出生致し候。即ち、其日恒之助尋ね参られ、対面致し、名をはつと付けられ候。其節薬罐に酒、田作につけ祝儀として持参、壺升入丸薬罐今に毎日用ひ候は是也。】

27日朝、きよは女子を出産、この時、中森重次郎の妻が助産婦の役を勤めて、取り上げてくれたことは後文に見るところである。

その日、城内にいた夫の恒之助が薬罐に酒を入れ、田作(ごまめ)をつけて持参し、赤ん坊には<はつ>と名をつけ、ささやかなお祝をしたのであったが、右の薬罐が、その後、その部屋に便利なものとして使われたという。

これで、この部屋には赤ん坊が二人となり、それに産後の床についているきよ、頭を破裂弾にやられたゆきなどがいたので、産婦人科の病室のようになり、姉のみつはこれらの附添兼看護婦のような役をすることになった。尤も、みつの妹ののぶ(33)、つや(31)、ゆふ(18)などもいたのであるが、これら三人の妹達は、一般負傷者・病人を収容していた大書院や小書院の方へ看護の手伝いに行っている時が多かったようである。

## Ⅱ 大奥局部屋出入りの混雑

【御次表使瀬山、御次女中うた兩人相部屋也。八畳敷にて、三尺に二間の押入あり、上はよき棚也。其間の内に入り候人別、

手おい	正斎 弟	川 村 丈五郎
同	民衛二男	石 沢 群 六
同		吉 村 吉太郎
		間瀬家内 七人
産 人		赤 羽 き よ
		同 は つ

瀬山下女の部屋は六畳敷にて直ぐわきなり、爰には、

手 負	御供番	野 田 善兵衛
		倅進付置看病人作平(長沼の人)
病 気	御 徒	黒河内 源 治
		母, 妻, 女むめ,
		荒 井 辰三郎母
真けい母		木 村 さ く
		中 森 大次郎夫婦
		同人倅 八才又は九才ばかり】

さて、この長局の一室たる瀬山部屋は、元来、御次表使の瀬山と御次女中うたの兩人の相部屋で、兩人の私室であったもので、広さは八畳敷で三尺に二間の押入れがあり、上には立派な棚がつけられていた。

ところが、この度の籠城で間瀬家族7人、赤羽家のきよとはつの二人だけではなく、上記のように3人の負傷者も一緒であったために合計12人の部屋となっていた。また、この瀬山部屋の脇の瀬山の下女部屋に充てられていた6畳の間はと見るに、負傷者、病人、看護人、その他の者を合せて11人であったから随分窮屈であって、或る者は廊下に溢れ出ているのではないかと考えら

れる。

図で見ると、本丸の長局は2棟20室で、1室の収容者の平均を10人とする、この長局だけでも約200人が生活していたことになる。

したがって、瀬山部屋や瀬山下女部屋だけではなく、他の部屋も同じように混雑を極めていたのであろう。このことは、広い大書院、小書院でも同様であって、

「本丸の大書院、小書院……頗る宏壮なり。敵の囲みを受けしより、或は病室とし、或は婦人小児を収容せり。戦酣なるに及び、病室は殆んど立錐の地なきに至り、手断ち足砕けたる者、万身糜爛したる者、雑然として呻吟す。」（山川健次郎「会津戊辰戦史」）  
とあり、＜立錐の地なきに至る＞が決して単なる譬喩でなかったことが知られよう。

【黒河内源治、荒井辰三郎とは徒之町表丁にて、隣家の由なり、黒河内源治子供四人、右の内、惣領むめ、次は男子、寄合白虎隊、其次は女子、<sup>お</sup>才に七才の由となり。

荒井辰三郎方にも子供四人のよし、しかるに廿三日立退きの際、混雑に取り紛れ、荒井辰三郎妻、子供四人連れ、立退き候処へ、門口より黒河内女子様、<sup>お</sup>才と七才の子供参り、源治家内は子供見えず、其儘籠城いたし、辰三郎老母七十才は、隣の源治家内と一同籠城致し、黒河内源治母も七十許の老人也。

子供いかが致候や(と)、明暮、年寄始め妻の歎き、たとへん様なく、毎日毎日涙のかわく間なく、癢など起す人もあれば、泣く人もあり。隣部屋の哀れさ、筆紙につくし難く、気の毒に存じ候。

源治事脚氣<sup>かつけ</sup>にて歩行相成り難く、女<sup>むすめ</sup>の看病を受け、まことにまことに目も当てられぬ有様に御座候。

しかるに、九月初めのやうに覚え候処、荒井辰三郎家内、南原村に居り候由、行方相知れ、黒河内女子も達者に御座候由わかり、年寄共始め、家内大悦びにて、母老人に子供六人(の)世話方察し入り候事とて咄<sup>はな</sup>し申し候。

それにつけては、南原村へ出候とて、妻も即刻参り度しと申し候処、娘むめ申し候は、親、歩行も出来ぬ人を離れ参り候事、相済むまじくと申し、妻は子供の方へ行きたくなり、其の談じ大騒ぎにて、年寄始め妻、娘むめ一同大悦び(にて)御城を出申し候。

木村さくと申す人は、黒河内とは近き親類のよしなるが、是は持病天癰<sup>てんかん</sup>御座候故か、御城に残り申し候。】

23日の朝、警鐘によって入城した者は、士分や、その家族だけでなく、<sup>かし</sup>徒士の黒河内源治、その母・妻・娘。荒木辰三郎の母、木村さく、中森大次郎夫婦などもいた。

黒河内源治、荒木辰三郎は、徒之町表町に住んでいた隣同志であり、二人共それぞれ4人の子供があつて、黒河内の長男は寄合白虎隊として戦線にあつた。

23日の朝、警鐘によって荒木辰三郎の妻が自分の4人の子供を連れて、家を立退こうとしていた門口へ黒河内の一歳と七歳の二人の女の子がやってきた。

黒河内源治の妻は、家に自分の2人の女の子が見えなかったが、倉卒の際のこととて、夫の老母、自分の娘むめ、隣の荒川辰三郎の老母などと一緒に入城したものの、老母の2人は、いずれも70歳ばかりの年齢のこととて、老母等は自分等の孫の入城<sup>しゅ</sup>していないことに気づき、明暮、之を悲しんで泣いており、時には癢などを起こす有様で、間瀬みづ女は隣部屋のことながら気の毒に思っていた。それに、源治は脚氣で歩くこともできず、娘の看護を受けていたのであつた。

ところが、9月初の頃、荒木辰三郎の妻が、自分の子供4人だけでなく、黒河内の2人の女の子達も一緒に連れて、南原村に避難していたことが分ると、両家の年寄を始め、源治の妻なども大悦びであつたが、辰三郎の妻一人で、6人の子供(自分の子供4人と黒河内の子供2人)の世

話をするのは大変であろうと、みな直ぐにも子供達の所へ行きたくなり、（娘は病人のことなどを言い出して少し渋ってはみたものの）大騒ぎの挙句、両家の老母だけではなく、源治の妻や娘のむめ迄も大悦びで城から出て行ってしまったというのである。

なお、徒士の家は、城の東北の徒の町にあり、間口は3間又は4間、奥行は5間又は6間で、これらの者は薄給のため、勤務の余暇に内職などをしていたと言われている。

永い間の息詰まるような悲壮な籠城中に、＜大悦びで城を出て行った＞とは、何となくユーモラスに感じられる悲喜劇でもあった。ただ、之に対して筆者は、如何にも自然的なこととして同情している点に注意される。また、この記事によって、29日の長命寺の戦の結果、城南からの出入りが幾らか緩和され、特に婦女子の場合には、その出入りが容易であったことが知られる、長命寺の戦の後には、前述の黒河内・荒木等の家族が出て行くとは反対に、次のように城外から城へ入って来た者も多かった。

### Ⅲ 長命寺の戦とその後の入室者

〔廿九日、長命寺進撃に出て、手負にて瀬山部屋へ来る。

原 田 主 馬

同日、徳久村より来る。

馬場与次右衛門、妻つな

伴淳二 妻ふじ

九月二日、本田村より来る。

中 沢 英之進

同人母 糸い（是は私伯母なり）

同人伯母 中野

同人姉 きわ

此人別、一同におり、外へ参り候人もこれあり、いとこきわも看病に出おり、ゆふ、つや一同出申し候。私とのぶは手負もあり、産婦にて、迷惑ながら御手伝は引き（受け）申し候。】

これ等の者は一緒にいたが、後に他へ行った者もあり、従妹きわ、妹ゆふ、つやなどは他の部屋の傷病兵の看護をするために一緒に出かけ、みつ女と妹のぶは負傷したゆきや産婦のきよの面倒を見てやらなければならないので、残った他の者の世話も、迷惑ながら引受けたというのである。

原田主馬が負傷して、瀬山部屋に入ってきたのは、長命寺の戦で負傷した結果であって、『会津戊辰戦争』に、29日のこの戦について、「東軍の惨状亦甚だしく、原田主馬先づ傷つきて戦列外に退き、戦死続出し、実に悲壮を極む」と述べられている。

この戦で特記すべきことは、間瀬家の当主の岩五郎が戦死している事実である。

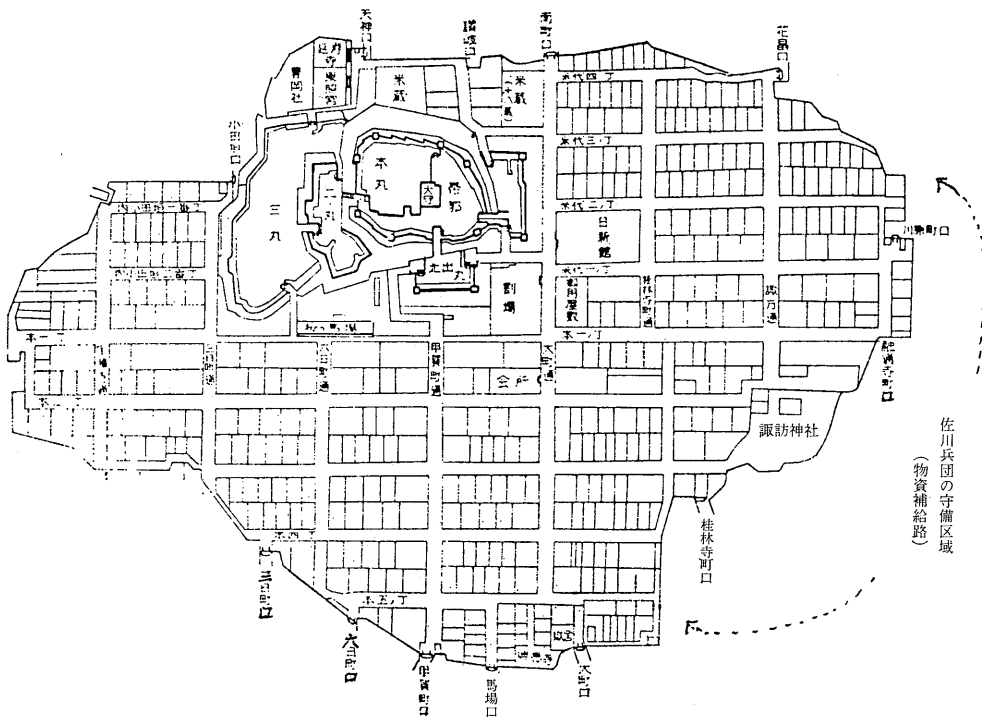
次に長命寺の戦について略説してみると、8月29日頃迄には、各方面に出動していた会藩の諸隊も城内に戻り、城中の者は老幼婦女を除いて三千数百人に達してきた。したがって、籠城兵力としては充分であり、この儘守勢を続けていては兵糧を食い潰し、ジリ貧状態に陥る恐れがあったので、補給路を確保する必要もあって、兵力の一部を城外に出して、積極的に野戦を展開する方針がとられた。

それで、佐川官兵衛を主将とした出撃隊が編成され、その兵力は約1,000人で、会兵は死を決してよく戦ったが、敵が堅固な囲牆溝渠を以て囲まれた長命寺の陣を利用するにおよんで、会兵の損害が多くなり、戦死者110人、この中には田中蔵人（600石）、小室金五左衛門（200石）、杉

浦丈右衛門（400石）、間瀬岩五郎（350石）、春日左久良などの隊長が戦死、9人の隊長の中の5人迄が戦死したのであった。

このように死者が多かったのは敵の火力を無視して進撃したからであった。この日、会津藩士の多数の者は、その背に＜慶応四年戊辰八月廿九日討死、何某、生年何歳＞と墨書して出陣した必死の決戦であった。

この戦は敗戦に終わったが、佐川兵团は、その後、城に入らず、桂林寺口から諏訪社を経て、融通寺門から川原口に至る間を守備していたので、結果としては、川原口を経て城の内外の交通路が安全となり、城内への物資の搬入の容易になったという。



第1図 佐川兵团の守備区域（物資補給路）

長命寺の戦で、間瀬家の当主であり、みつの弟、ゆきの夫である岩五郎（29歳）の戦死したことにについては、本書に全く記されていない。だが、『会津戊辰戦争』には「間瀬岩五郎戦死するや、従僕之を見、混戦乱闘中其首を斬て帰る。家人之を見るに切口宛も鋸断せしが如く実は無惨なりしという」とあるから、家人は之を確かに見ていることが知られる。

同じ戦線と一緒に戦って負傷して戻った隊長の一人の原田主馬が瀬山部屋に來たり、時々その顔を見せているのに、弟の戦死や戦の様子、又はみつ女の之に対しての感慨等については全く何も記されていない。

### Ⅲ 瀬山部屋の食糧事情と物資の搬入

「廿六日七日頃にもこれあるべし。杉田兵庫参られ、私方にて品々屋敷元（取りに）遣はし（候まま）おまへにて人を品取りに遣はし候様申され候に付き、<sup>つか</sup>六沢九平を頼み、若党

初治兩人、元屋敷へ行き、焼赤鍋（馬の飼鍋なり、三升炊き）、かなべ二、生くり一、茄子漬一、皆々悦び、三升入の赤鍋へは、沢庵漬あと先焼け候を拾ひ帰り申し候。

本屋は申すに及ばず、土蔵、木小屋、長屋残らず焼け申し、大根卸し焼け崩れおり候とて持参致し候。右につき、大きに卸し金<sup>おろし</sup>はやり物にて、所々歩き、用に立て候。

漬物は珍らしく、少々づつも配分致し沢庵大根は後先焼け候のみにて、給され候まま、奥へも上げ、所々へ配り申し候。】

8月25日の火薬庫爆発の時の天地も覆<sup>くつがえ</sup>るような大音響に驚いて、鶴ヶ城も今は最後と早合点して、杉田兵庫の家族4人が本丸御休息の間で自刃しようとしたが、手当ての結果、母と妻の命を取り止めたことは既に述べた処である。

杉田兵庫の邸は、甲賀町通と本二之町の角にあつて間瀬家の隣であつた上に、自刃騒ぎ<sup>かど</sup>の日は杉田家族・間瀬家族は一緒であり、間瀬家族に大変世話になったからであろうか、その後、杉田兵庫が自宅の焼跡に残っていて、未だ何かの役に立ちそうなものを取りにやるから、間瀬家でも誰かを遣つてはどうかという勧誘があつたので、間瀬家では穴沢九平に頼み、若党など2人を連れて行って貰ひ、元の屋敷から焼赤鍋、燗鍋、生栗一袋、茄子漬一樽などを持ち帰った。

三升入の赤鍋へは後先の焼けた沢庵漬を入れて戻ってきた。屋敷は本屋、土蔵、木小屋、長屋に至るまで残らず焼けてしまつていたが、そこで大根卸しが見つかったというので持ってきた。

この大根卸しは、籠城の今となつては大変に便利なのが分り、各方面に借りられて行つた。漬物も珍らしいので、少しずつ皆様にお分けしたが、沢庵<sup>たくあん</sup>などは後先が焼けているだけで、その部分以外は食べることができたので奥へも差し上げ、所々へ配つて喜ばれたというのである。

日頃は別に重宝だとも思わずに使つていた大根卸が籠城中の各方面に珍重されて、引っ張りダコの流行物になっていたとは面白い現象であつた。

次に日附は明記されていないが、大体、9月に入つてからの籠城中の食物や生活必需品に関係ある章を便宜上一括して示してみる。

\* \* \* \*

- 病人の食物は白米（の）お結び下され、稀々には鶏肉、牛肉、鯨<sup>にしん</sup>など下され候事、平人は黒米（の）お結び下され候事。

何事も調へ物相成らず、今日今日と凌ぎおり、大豆、南瓜、いづれも落し味噌にて煮申し候。壺升炊き鍋にて（煮）候て、二拾壺式人にて給へ候事故、いつも物不足に覚え申し候。

おこし炭は女中御渡しの内、わきのすみ部屋より取り、籠城の内凌ぎ、七輪は馬場より借り、大きに仕合せに御座候。

すべて不自由なる事は話の外と云ふべし。今日ありて明日を待たぬ命なれば何の気もなく、只死にゆくを持つのみなれば、心も心ならず、只二人の赤子共助けたく思ひおり候。今の心とは雲泥の違ひなり。

- 下谷東江より松茸三本、味噌を赤椀に入れ貰ひ、是は初めて給へ候故、別して珍らしく候、下坂直右門、穴沢九平よりは、といも、丸めろ、ろうそく持参致し呉れ候。
- 黒河内伝八より味噌、切溜<sup>きりだめ</sup>一つ、上々大根をつけ送り下され、誠に珍らしく、われわればかり（の）給べ物に（ては）なく、みなみな配分いたし、若き手負の人にも大悦びにて賞翫致し申し候。
- はつ誕生につき、此節御難儀の事にこれあるべくとて、つつとふし二、いら紙二帖御持参下され候処、手前に（ては）何とか衣類は間に合ひ候間、外の難儀の方へ御廻し下され候様お断り申し上げ、いら紙ばかり頂き候事
- 原田主馬氏より大和芋など産見舞として下され候。野田善兵衛よりいら紙二帖貰ひ申し候。



又、知り合ひの人々より、大根、茄子漬配分下され候。

板橋八郎、小ざる子に数の子持参致し候。是も珍らしく賞翫致し候。

後には入城の節よりは少々凌ぎよく覚え候。

明し油、灯芯は毎日御末女中（が）持参下され候事に御座候まま、さしつかへなく御渡しを受け取り、有難く凌ぎおり申し候。追々寒さに相成り候に、暈は胸壁に致し、ねた板に薄縁（を）敷き候事ゆえ、衣類も薄着にて夜寒に相成り一同困り申し候处、原田主馬心付にて、幕半ばかり御張り下され、それにて余程凌ぎよく覚え候。

- 黒河内伝八宅土蔵より出で候とし、五つみふとん中綿二つ、はもの三、四枚、こん単かんばる一、脚絆一、ぬき手わた二□□、御もん付風呂敷一。吸物椀十人前、箱入にて七升入金たがはおち、白金姿見鏡一面。右の内吸物椀十人前、箱入七升入大はち、姿見鏡一面、かた付単物一、紫紋付、は物、大風呂敷は返し申し上げ候。残りは貰ひ寒さを凌ぎ申し候。

\* \* \* \*

籠城中の食糧は、一般藩士・婦女と負傷者・病人の場合とでは異なり、一般の者には玄米の結びに僅かの副食物、負傷者病人には白米の結びに、稀には鶏肉・牛肉・鯁などが給されていたことは、みつ女の手記、その他によって知られることである。

だが、大書院、小書院等の広間に一緒に入れられていた数百人の負傷者病人とは異なって、大奥の長局に収容されていた者は、2組又は3組の家族が寄り合って生活していたらしく、所定の食糧は割り当て制にしても、之を如何に煮炊きして食うかということ、又は之を何らかの方法によって補給することは、各部屋毎に自由であったようである。

したがって、「何事も調へ物相成らず、今日今日と凌ぎおり、大豆、南瓜、いずれも落し味噌にて煮申し候。一升炊きの鍋にて煮候て二十一、二人に給べ候事故、いつも物不足に覚え申し候。すべて不自由なる事はお話の外といふべし」と述べているが、瀬川部屋は当主岩五郎妻のゆきの負傷、産後の赤羽きよ、それに2人の赤ん坊のいた部屋であり、弟源七郎は白虎隊として飯盛山に自刃し、岩五郎は29日の長命寺の戦で壮烈な戦死をしたことも、一般に周知の事実であったので、9月に入ると親戚知人からの同情も集まり、城の内外から色々な補給物資が＜見舞＞の名目で贈られるようになった。

之をみつ女の覚書によってみると、親戚知人から寄せられた食べ物、特に珍らしい物は、なるべく他の者にも分ち、籠城者として当面不用の物は之を辞退していたようである。次に、瀬川部屋の間瀬家の者へ贈られた食物を一括してみると、

□大豆・南瓜・味噌・大根、茄子漬・松茸・数の子・唐芋・大和芋・丸めろ

などがあり、この等の多くは、城外から、親戚・知人の者が敵の眼を潜って運び込んだものであり、右のうちでも味噌・大根などは必需品のこととて、再度にわたって贈られている。

なお、食品外のものとして、二回も贈られ、喜んで納受されている物に＜いら紙二帖＞が見られる。これは婦人にとっては必需品であったからであろう。

また、戊辰の年は閏月があったので、秋冷も早く、9月に入ると、「追々寒さに相成り候に、暈は胸壁に致し、根太板に薄縁敷き候事ゆえ、衣類も薄着にて夜寒に相成り一同困り申し候」とあるように、城内に於ては衣類の不足が特に甚だしかった。

したがって、後になると、親戚の黒河内伝八から、その土蔵から持ち出した吸物椀十人前、七升入の金たがお鉢、白金姿見鏡と共にいろいろな衣類が贈られた時、彼女は布団綿・拔手綿・脚絆などだけ貰って、他の品々は辞退して受けなかった。

彼女が「後には入城の節よりは少々凌ぎよく覚え候」と記しているのは、長命寺戦以後は、城南の方からの補給が比較的緩和されたことにもよると思われる。城南の村々から瀬川部屋を訪れ

ている知人の多く見えるのも、このためであろう。

城外からの物資補給が至難になったのは、9月14日の官軍の総砲撃から以後のことであって、それ迄の城外からの食糧その他の物資搬入の状況は次の一文から推知することができる。

「九月十四日戦争の以前に、材木町瓦町辺へ参り、勝手次第、着類の他何にても城中へ持ち入り用ひる事苦しからざる旨諸隊へ達し有之に付、諸隊残らず出張して、彼の町家の焼け残りし古蔵を打破り、着類夜具は申すに及ばず、味噌・塩・醤油・鍋・釜・桶其他何によらず、屯所へ持ち来り、大いに都合よし。

是を以て寒気を凌ぎ、煮炊きも出来、氣力を養ひけり。且つ、南口番兵の序<sup>ついで</sup>には、焼跡屋敷の畑に行き、芋大根を持ち来り、汁の実にして用ひ、格別食物に差し支へなし。」

(『心苦雜記』)(注三)

## V 菊花一枝の重陽の宴

【九月九日重陽につき、菊の花一枝民衛様より貰ひ申し候。酒など入れ候故もろみを給<sup>た</sup>べ申し候。其風味良く、みなみな悦び、父上様へも差し上げ候処、珍らしきとて御悦び御上りなされ候。何とか入れ物なくば、鍋なりとも少々かこひ置き候様御申しなされ候へども、何一つ入れ物もなく、思し召し通りにも参らず残念に存じ候。

其頃は日和<sup>ひより</sup>良く穏かに候処、今にも敵攻め入り候ものやら相知れ申さず、みなみな覚悟致しおり候。】

9月9日は菊の節句である。瀬川部屋の間瀬家族は籠城中の親戚の石沢民衛から菊の花一枝を貰い、もろみを入手して城中の父親兵衛にも賞味させて、喜ぶ顔を見、なお、残りをかこって置くように言われたものの、之を入れて置く適当な容器もなく、＜思し召し通りにも参らず残念に存じ候＞と述べている。

この頃は日和<sup>ひより</sup>もよく穏かな日々であったが、嵐の前の静けさのように何となく無気味で、＜今にも敵攻め入り候ものやら相知れ申さず、みなみな覚悟致し居り候＞とあるが、この日から5日後の9月14日には官軍の総砲撃が行なわれ、この日、父の新兵衛(67)は城中の御座二之間で、破裂弾にあたって斃れたのであった。

また、この日には、既に降伏した米沢藩の者が、ひそかに会津に来て、帰順を説いており、一方、今迄会津側として戦っていた大島圭介等の伝習隊、古屋衝鋒隊が米沢口官軍の到着前に、会津平野を脱出しようと小田付(喜多方)を出発するなど、会津藩には愈々孤立の秋が迫っていた。

## IV 官軍の総砲撃(四)

【十四日は大砲の音絶え間なく、今にもいかやうに相成るやと(覚悟致し居り候)。一日に千発も撃ち候よし。(「哉」の字は誤と考えて除いた。)

十五日十六日迄三日の間、終日玉来り、其後は十七日より穏かに静まり居り候。

十六日、ゆふ事、風邪引きにて打ち伏し、とかく、はかばかしく御座なく皆々案じ居り候。】

9月14日は官軍の総砲撃の日で、これは会津側が8月29日以降、融通寺口、川原口、花畑口等を確保し、城内から郭外に自由に入出入りしていたのに対し、官軍はその出入口を押さえ、外郭線迄前進して攻囲網を縮めようとするのが目的であった。

この日の砲撃の凄惨さについて、平石弁蔵氏は、「是に於て九月十四日午前八時を期し、全

軍同時に攻撃を開始し、外郭十六門、其他小田山、館の荒神祠及慶山畑地に砲列を布き、四面<sup>ひそ</sup>斉しく砲撃を開始す。総攻撃開始、銃砲弾丸縦横に飛び、猛火東西に起り、天守閣は殆んど弾巢となり、昼夜無数の砲弾を被り、附近の樹木は折れ、瓦石は飛び、百雷絶えず鳴動するが如く、死傷従って相踵ぎ、時々刻々凄惨の状を極む。」（平石弁蔵「会津戊辰戦争」）と述べている。

この3日間続いた総砲撃が、当時城内にいた婦女子の眼にどのように映じていたかを比較のため示してみると、先ず、会津婦女隊の一員として有名な依田菊子（18歳）は、その85歳の時に之を回顧して、

「この籠城は、とても大変に難儀でして、絶えず撃込む砲弾が所嫌はず、爆発する。傍に働いて居る人が右に左にバタバタと倒れる。其処等は一面の血だらけ。殊に最後の三日三晩は大砲攻めの打続けで、径五六寸もあらうと云ふ、とても大きな砲弾が飛んで来て、御飯を焚く所など砲弾で何も彼も飛ばされて無くなってしまいました。

こんな有様でしたから、何処で何時撃たれて死んでも構はないと思って居ましたが、唯はばかり<sup>（注五）</sup>は一杯でしたので、はばかりの中だけでは死に度くないと思ひました。馬などは括ったまま、誰も構ふ者もない所へ、四辺<sup>あたり</sup>構はず銃砲弾の炸裂で、ヒーン、ヒーンと啼いて可哀想でした。」（「会津婦女隊従軍の思出」昭和7・8・21「日曜報知」第117号）

次は入城の時、他の婦人はみな薙刀を持って入城していた中に唯一人七連発のスペンサー 銃を肩にして、男装で入城した山本八重子(24)が、後に同志社大学創立者新島譲の夫人となってからの談、

「敵の総攻撃は九月十四日の早朝六時に始まり、毎日夕の六時頃迄は、実に凄まじい勢ひで砲撃をしました。無論、小銃弾も三方面より非常に来ましたが、大砲の音に消されて少しも聞えませんが、只バラバラツと、霰の如く絶えず来て居ました。それに頭上で爆発するかと思ふと、脚下に砂塵を揚げる、瓦は落つる、石は跳ぶ、城中はまるで濛々たる硝煙で殆んどむせぶ様な有様、然し、誰一人逡巡<sup>ためち</sup>ふものなく、むしろ反って勇氣百倍、子供等は濡れ蓑<sup>ぬれさ</sup>を以て縦横に馳せ廻って、焼丸<sup>やきだま</sup>を消して居る。婦人は弾薬の補充に奔走し、或は傷者の運搬救護等、其の多因多難の有様、なんとも話になりません。

妾<sup>わかし</sup>も一寸の暇を見て、有賀千代子さんと共に握飯を盆に盛り、大書院小書院の病室へ運搬中、轟然一発<sup>あしと</sup>脚下に破裂し、砂塵濛々として眼も口もあけず、呼吸も出来ず、暫時たたずみ、漸く目を拭うて見れば、千代子さんも煙の裡に立っては居るが其顔は、まるで土人形の怪物そっくり、これには妾も可笑しくて抱腹絶倒をしました。

然し、千代子さんも妾の顔を指さして笑ひこけて居ました。御握はと見ると、又驚きました。全く蟻塚をそっくり盆に載せた様に塵一杯になって居たので、これには落胆<sup>がっかり</sup>しました。

（中略）月見櫓に居た老人が主として小田山方面の砲声を聞きつつ、黒点を以て昼間だけの弾数を調べると千二百八発であったと申して居ました。大書院の病者は昼夜を通して二千五百有余を算したそうであります。随分猛烈でありました。」

この砲撃に対して、大奥も決して安全ではなく、奥御殿の一室に畳を立てて防壁を造っていた照姫の居室でも砲弾が破裂し、照姫を護っていた家老山川大蔵の妻とせ(19)が重傷を負うて瞑目している。

この時、兄嫁を介抱した義妹の操子(17)の記すところによると、

「私の姉も脛から腿にかけて一発、脇腹へ一発、右の肩へ一発と頬へ一発の弾を受けました。脇腹からは血が泉のやうに流れ出ます。殊に肩に当たった一発は着物に入れてあった真綿

を肉の中へ押し込んでしまひました。

医者がまゐって肩の着物を引出しましたら、弾もボクリと出て、血がドクドクと流れ出ました。死者は葬る暇もございませんから、掘っても水の出ない空井戸の中へ泣く泣く埋葬しました。しかし、姉の死骸は兄の手兵が大分をりましたから、鎧櫃に入れて懇に葬っておきました。」（明治42年7月「婦人世界」）

と記されており、この総攻撃の日に、みつ女等の父新兵衛も敵の破裂弾によって死亡しており、同じ城中のこととて、父の死骸は見せられたと思われる。だが、彼女は長命寺の戦後に当主（弟岩五郎）の鋸断されたような、むごたらしい首を見た時のことには、少しも触れなかったと同様に、父の戦死については一語をも記さず、自分が看病していた末妹ゆふ(19)の病状について、〈とかくはかばかしく御座なく皆々案じ居り候〉と悲憤の情を他に外らしている。

## VII 大奥長局の水汲み

【九月日増しに寒さに相成り、いつまで斯様致し居り候や、外へも出られず、皆々困り、寄り寄り話し居り候。毎日の水も手洗ふ事も為し難きぐらいの事にて、誠に是には当惑致し居り候。

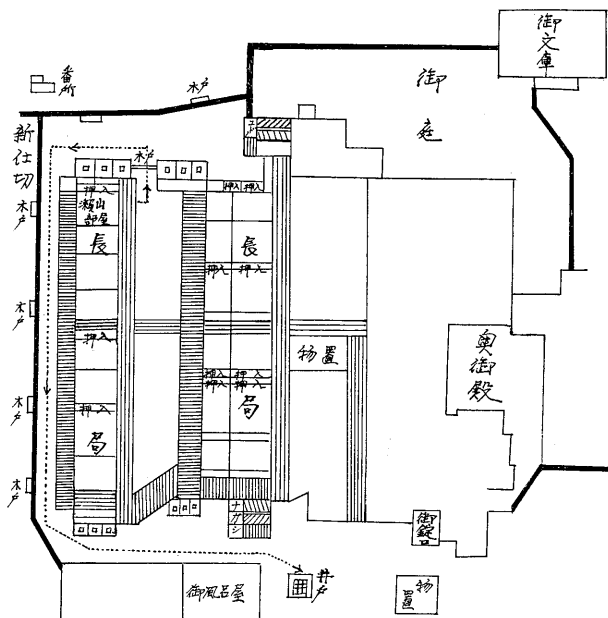
水は朝夕汲みおり、是は御錠口外に大井戸これあり、高き縁に上り、なかなか女にては汲み上げる事むづかしく、手桶を持ち参り候へば、大勢上り、汲みおり、自分汲む心にて参り候、などと申す。

とても私むづかしき故、御頼み申し度しと申し候へば、其心なら汲み上げ候などと、いつにても、かやうの事など言ひながら汲み貰ひ申し候、瀬山部屋より廻り廻って壱町余も御座候はん。

しかるに、三州吉田藩、かん義隊指図役吉田幸一郎と申す人、手負につき、東京の人西村一郎と申す看病人なり。兩人共、私共向の角縁側におり、誠に何もなく気の毒(なる)有様故、何にても煮物など漬物等遣はし置き候処、是も僅かの品とて、贈り居り候処、右の礼なりとて、毎朝一郎水一手桶づつ汲みくられ、まことに有難く用ひおり候。】

鶴ヶ城(若松城)の本丸の図を見ると、本丸には5個所の井戸があり、この他に天守閣の傍に〈カラ井戸〉がある。だが、当時五千人の籠城者が、弾雨下にあったこととて、水に困ったことは、「毎日の水も手洗ふことも為し難きぐらいの事にて、まことに是には当惑致し居り候」と記されていることによっても頷かれることである。

綱帯や血に汚れた負傷者の衣類の洗濯は、婦人の仕事であったと



第2図 瀬山部屋および水汲み経路（推定図）

諸書に見える処であるが、一般籠城者の衣類や赤ん坊のおむつおむつの洗濯などはする余裕もなく、また風呂などに入ることでもできなかったであろう。

出羽重遠（海軍大将、男爵）は、当時14歳で城中で＜弾拾い＞などに従っていたが、「銃砲弾より恐いのは虱であった」と述懐している。これも水不足にも由来していたと思われる。

城内の井戸は家庭内の井戸とは異なり、深くして大きな井戸であったために、婦人達はその水を汲み上げるのに難渋していたことは上記の本文によって知られることである。

特に水桶を手をさげて、御錠口脇の辺の井戸から一町余も長局を廻り廻って運ぶことは、馴れない藩士の妻女や娘達には大変な苦勞であった。

部屋毎に煮焚き、濯ぎなどをしていたようであるから、一日一桶の水は是非共必要であったであろう。これについて筆者は、向部屋に入っていた負傷者の看護人が他国者の男のこととて、何処からも補給食品などを贈られることもない侘びしい日常を見て、間瀬家で漬物を貰ったり、煮物などをした際に少しずつ之を分けて遣っていたために、向部屋の看護人は男のことであるから、その御礼のつもりで毎朝一手桶ずつ汲んでくれたので大助かりであったという人情話が見られる。

なお、この記事に見られる＜瀬山部屋より廻り廻って一丁余＞もある御錠口近くの井戸、看病人西村一郎等のいた所が＜私共向の角の縁側＞、それに前に見えた八畳の瀬山部屋の脇には瀬山下女の六畳の部屋があったことなどを総合して考えてみると、長局における瀬山部屋の位置を見当づけることができそうである。

## Ⅷ 城内のどよめきと矢玉止め

【毎日毎日と暮す内に廿日頃にも相成り、鉄砲の音も薄く相成り穏かになり候ても、案じられ候事に候。それより廿日夜と覚え候。内々御城内何やらどよめきわたり、いか様の事に是あるやと承り候へば、御降伏にも相成り候や（の）風説もこれあり。いよいよ右の御都合にて米沢藩取扱いの由承り候。

九月廿一日矢玉とめに相成る。】

籠城といえば、何より先ず懸念されるのは食糧である。会津藩では、官軍の先鋒の城下突入があまりにも急速であったために、郭内や城外にあった穀倉から米を搬入する余裕もなく、籠城中は食糧の不足に苦慮していた。

尤も、籠城当初は飯寺代官所の管轄する米倉から米を城内に搬入したと言われているが、9月に入ると食糧欠乏に苦しみ、9月8日には佐川官兵衛の率いる約400人の一隊が日光口の官軍の後方を脅かし、10日には大内村や倉谷村にあった官軍の糧食、兵器の集積所を襲い、多量の兵器糧食を分捕って城内に搬入し、その他諸隊をして米穀野菜を村落から徴発させて城内に入れさせたのであった。

なお、これは9月に入って食糧事情の窮迫していた頃のことと思われるが、城内で道明寺糰かれひや田螺たにしの干物を発見して、その急を救ったこともあった。

「兵糧乏しかりける折、或櫓の中より道明寺糰を見出して、数日間の賄としたるは、玄米に比ぶれば頗る美味なるを覚えし。何の日に造りて入れ置きしにや聞かまほし。」（「七年史」第二十卷）「天守閣下に方形の穴蔵あり。……食塩以外に多量の田螺を貯蔵しあり、その何れの代より貯蔵せるものなるや、また之を知らずといへども、よく煮て十分に乾せしものなり。

故に糧食漸次欠乏を告ぐるに方り、如何に戦士を救ひたるや知るべからず、然るに是又漸く尽きんとす。」（平石弁蔵『会津戊辰戦争』）

食塩は天守閣下の穴蔵に前々から多量に貯蔵されており、三之丸倉庫にも多く貯蔵されてあったので之については心配はなかった。

要するに、食糧、兵器弾薬の欠乏、開戦以来死傷者が夥しく多くなっていたのに反し、包囲軍数万に取り囲まれ、奥羽越諸藩同盟の各藩が続々官軍に降伏して、会津藩が全く孤立してしまったことなどが敗因と考えられ、9月18日の官軍の高田攻撃戦によって、鶴ヶ城が外部との連絡を全く遮断されてからは食糧弾薬は底を衝き、補給の途もなくなってしまった。

19日に会津藩の手代木直右衛門、秋月悌次郎が塩川の米沢藩本陣に行つて降伏の幹旋を依頼し、米沢の将斉藤主計の案内によって、七日町の土佐藩の陣営に参謀板垣退助を訪うて降伏の申し入れをし、同日会藩の両使者を一旦城中に帰し、2日の猶予を与えられ、22日を以て開城の日と定めていたから、20日には、恐らく城内において最後の会議が開かれ、松平容保の裁決によって遂に降伏の途が選ばれたのであろう。上記本文中の＜それより廿日夜と覚え候。内々御城内何やらどよめきわたり＞というのは最後の会議後の城内の何とも名状することの出来ない雰囲気をも端的に表現したものである。

苦しい籠城は終った。しかし、これから母と四人の妹、当主岩五郎の若い妻ゆき、それに二人の赤ん坊（甥の清吉と姪のはづ）との計8人を抱えて生きてゆかなければならない38歳のみつ女は、その一家から三人の男の命を奪った戦の終結に対し、冷然として無感動のように＜九月廿一日矢玉どめに相成る＞と結んでいる。

鶴ヶ城の北大手門に白旗が立てられたのは、明治元年九月二十二日の午前十時であった。この白旗は前の晩に城中の会津藩婦女が泣き泣き縫ったものであって、今朝は誰も之を見ようとはしなかった。ただ、男装して藩士と共に闘った山本八重子は之について、次のように語っている。

「妾は正門の傍より遙かに見ましたので其場所は判然しませんが、御城の直ぐ前の西郷様と内藤様との間、石橋の辺と申していました。此時妾共に実に口惜しくて暗涙を吞んで見て居ましたが、中には石垣に頭をつけて歔歔流涕して居た婦人もありました。

降参の旗は長さ三尺、巾二尺位、それも小布を多数集め漸く縫合したもので、之を縫ふ人達は泣きの涙で針先は少しも進まなかったと申して居ました。」（平石弁蔵『白虎隊及娘子軍高齢者之健闘』）

上の白旗を縫うのに＜小布を多数集めて＞縫ったのは永い間の戦争で、多くの負傷者のために普通の白布は綱帯にして使い尽くしてしまったからであった。

なお、間瀬一家の者が城を退出したのは、少し遅れた24日であつて、

「廿四日午後私家内一同城を出、廊下橋より二ノ丸御門、三ノ丸御門を通り出候処、豊岡の上延寿寺一面、敵何百人居候か、萌黄、赤、色々の色頭を着し相固めおり、其くやしき事言ふばかりなく、此方はまことに哀れなる姿にて通り申し候」

と、彼女はここに初めて、自分等の敵であつた薩長土の兵と相見え、その鬱積した感情を吐露したのであつた。

## あ と が き

『戊辰後雑記』は鶴ヶ城の奥御殿の一隅、長局の病室ともなっていた瀬山部屋で見聞した事実をありのまま記したメモ的な覚書である。従つて、籠城時の他の奮戦記などとは異なつて、慷慨悲憤や壮烈痛快の趣が見られず、筆者は寧ろ、そのような叙述を避けて、＜親類籠城致し居人別＞の書き留めや、＜御城へ見舞くれ対面致候人々＞の記事、或いは知人、親戚等から贈られた食物・衣類・台所用品などに関することなどを多く記している。

ここに、＜女性の籠城＞という異常な事態にあっても、戦争に酔うことなく、女性としての日常的・実的な心遣いを失わなかった彼女の生き方が見られる。

戦死した父や二人の弟のことなどには努めて触れず、目前の末妹に対して「十六日、ゆふ事風引にて、うち伏し、とかくはかばかしく御座なくみなみな案じ居り候」とか、入城直前に我が子や孫を見失って、之を朝夕悲歎していた隣室の老女達に対し、「隣部屋の哀れさ、筆紙に尽し難く気の毒に候」と同情を寄せ、その後、行方が知れるや否や、我が子に逢うために、大喜びで城から出て行くのを、如何にも当然の人情として記していること、或いは「けふありて、あすを待たぬ命なれば何の気もなく、只死にゆくを待つのみなれば、心も心ならず、只二人の赤子共、助けたく思ひおり候」などとあるのも、その恒常的な女性の心的態度の現われであり、即ち、異常時にあっても異常に圧倒されずに、普遍的な女性の心情を重んずるヒューマニズム的なものである。

また、「九月日増しに寒さに相成り、いつまで可様致しおり候や、外へも出られず、みなみなこまり、寄り寄り咄し居り候」というのも、恐らく長局における実情をそのまま述べただけのことであろう。

そして、これは籠城も愈々大詰になった頃の「それより廿日夜と覚え候、内々御城内何となくどよめきわたり……九月廿一日矢玉どめに相成る」という、さりげない一文と相呼応して、長期籠城も遂に落城と決した時の籠城者集団の心の複雑な陰翳を隠微なうちに表現した出色なものとなっている。

なお、筆者みつ女の本領は、落城後、南部の一寒村に移住した時に、遺憾なく発揮されていることを附記する。

〔注一〕山川 操……………家老山川大蔵の妹、山川家の婦女も全員入城した。母、妹二葉(25)、常盤(11)、咲子(9)、大蔵の妻とせ(19)などで、弟健次郎は士中白虎一番隊として藩公に従って、滝沢村に出陣。山川大蔵は主命により前線より戻り、城中の守兵に味方であることを分らせるために、部下の諸部隊に会津特有の獅子舞を奏させて堂々と入城させたので特に有名になった。

〔注二〕小池稼吉……………網淵謙鋌氏は小池勝吉と改めている。（別冊文春第136号の「戊辰去来」）

〔注三〕『心苦雜記』……………美濃郡上藩の凌霜隊員矢野原与七の手記。この凌霜隊は美濃郡上藩の命を受け、中仙道を長駆転戦して、9月5日に鶴ヶ城救援のために入城し、隊長朝比奈茂吉（17歳）以下37名は、白虎隊（士中白虎一番隊の全員、士中白虎二番隊の生き残りで、後に入城した数名）と共に西出丸の防衛を担当して最後まで戦った。

会津藩降伏後、凌霜隊が帰藩すると、郡上藩は維新政府に迎合して、凌霜隊を勝手に脱藩して鶴ヶ城に入ったものとして、極刑で処分しようとしたが、郡上領内の全寺院の抗議によって、漸く、全員＜斬首＞だけは免かれた。藩の首鼠両端政策の犠牲である。

〔注四〕官軍の総砲撃……………大山柏「戊辰役戦史」によると、明治元年9月14日に使用した大砲は「総数約五十門」とある。

〔注五〕はばかり(廁)……………山本八重子談にも「一番心配でたまりませんでしたのは廁に入っている時でございました云々」とある。この理由は次の凌霜隊員山田熊之助の手記によって、見当づけられる。「城中にて困難なるは糞也。何分多人数籠城のことゆえ、雪隠は忽ち一杯となり。是を掃除するものなく、末には道端にもあり、足の踏場もなく大難儀也」（『夢物語』）要するに、婦人として、このような特に汚い所では死にたくないというのであろう。